

「戦争は悲惨だ 歴史から学ぼう」 今 博文さん

小学4年生、9歳の時に青森空襲を体験しました。私は当時沖館に住んでおり、沖館海岸で連絡船が沈められるのを見ていたら、突然グラマン機が爆弾を落としました。飛び上がった泥を全身に浴びましたが、幸い怪我はしませんでした。B29の空襲では、明るく熱い風が吹く中、熱風に追われて逃げてくる人達の叫び声と泣き声が聞こえてきました。

翌朝、墓地で兄の同級生の弟が血溜まりの中で死んでいるのを見て、私は震えていました。

空襲から3日目、兄と二人で市内に行くと、まちは焼け野原で堤川まで見えませんでした。防空壕から飛び出した人が、全身やけどをして黒い塊になり、目や鼻穴からはうじ虫がこぼれ落ちていました。これを見た兄は「戻るべし」と言い、私たちは戻りました。

喉元過ぎれば熱さを忘れるといいますが、悲惨な戦争は忘れてはならず、語り継がなければなりません。

※青森空襲を記録する会発行「次代への証言第25集」から要約